



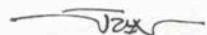
視線について
充分な研究とトレーニングを
かさねたおかげで

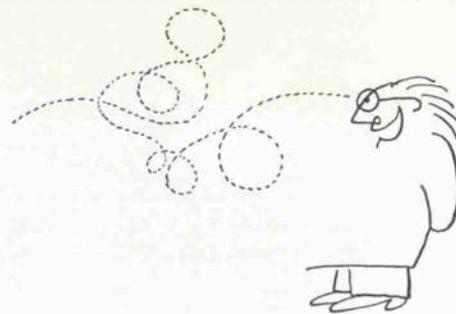


今や 自分の視線を
自由にコントロールできるまでに、
いたった



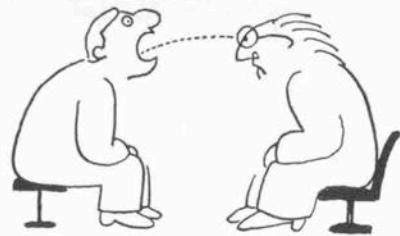
私なんざ むかしから
教授の視線を
コントロールできますがね……





わしの自由自在な
視線をもってすれば
胃カメラなんぞ
無用じや

ひとつ見てください



痔じや



●ふらつしゅ ●ばづく ●

ナポレオンと キノオートマツトと レネ

淀川 長治
(映画評論家)



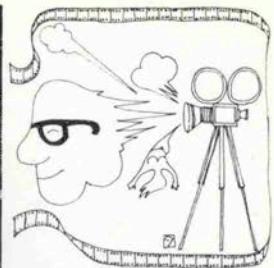
大阪ガス「ワンダーランド」の映画あそび

十一才でまだ健在と聞く。

「ゴッドファーザー」「地獄の黙示録」のコッポラ監督がガーンスの「ナポレオン」に魅せられたことがわかるし、これを東京でも上映したがって来日したこともわかつてきた。ナポレオンにはアルベル・ディユドネ、ジョセフ・フィンにはジナ・マネが扮し、アナベラも出演している。三つのスクリーンの使用法は中央が市民の群像、両がわが兵士の進軍と大砲といったスクリーン演出である。

ポートビア81で大阪ガスワンドーランドの(キノオートマツト)というのを見物した。チエコが発明した面白い映画遊び。チエコと日本の共作となつて日本人も出演している。四十二分のその映画は可愛い面白いストーリーを持つていて、ことしの一月の二十三日、二十四日、二十五日の三日間ニューヨークのラジオ・シティ・ミュージックホールでこれを上映し、そのときのこのサイレント映画の音楽伴奏にはコップ・ボラの父のカルミネが六〇名編成のアメリカン・シムフォニー・オーケストラを指揮したことでも話題を作つたが、このガーンス監督の「ナポレオン」のトリブル・エクランと呼んでいる三つのスクリーンの同時上映つまり今日のシネラマの前身手法が大変な評判をとつた。

ガーンス監督は一九三四年にこのフィルムをトーキーにしてようとしてマルティ・スピーカーつまり現在の立体音響をこころみて当時の観客を驚かせた。ガーンスは芸術家であったがまたすぐれた科学者だともいえる。ことし九



右は赤ボタン、左は青、さあボタンを押して下さい……

瞬間、画面の外の両わきの四角いスクリーンに観客のボタンの赤と青の押したボタンの数が現われその合計がその場で一瞬に計算され、赤の数が多いとなると……場面はサツと赤ボタン指定のシーンになり青ボタン指定のシーンは画面外へ押し出されてしまう。これで観客はそのたびに二つのストーリー進行のどちらか一つを選ぶこと

になる。どういう仕掛けかと映写室を覗くと二台の映写機が用意され、(青)が多いと自動的に青のフィルムが映写、(赤)も同じ、という面白い映写の工夫がされた。ところで赤と青が同点だったとき、それはボタンを押した早さが勝ち。一五四名の客席は画面がストップし

「アメリカの伯父さん」より

て『さあ、あなたはどちらでしよう』の進行係り女子の言葉に楽しげに騒いでいた。スリラーーやサスペンス映画がこの手法を本式に映画館で用いると面白い(映画遊び)となるだろう。

X

○を見る。「去年マリエンバートで」「プロビデンス」古くは「二十四時間の情事」などのことし五十九才のフランスの監督。

意識上の時間と空間を映像化するといわれる注目の監督である。アベル・ガンヌもフランス人だが、そもそも活動写真からトリック撮影を発明したのもフランス人。映画を(音楽)のように(小説を書くペン)のように自由自在にもてあそぶ。ジャン・コクトーもそのひとり。ところでアラン・レネの「アメリカの伯父さん」は二組の夫婦のその人生を(ときに虫けらのように)(ときにネズミのように)見下ろし見つめながらその男女の神経内部に迫って、それぞれの人間のあがき、成功、失敗、恋、自殺未遂、それらが画面の中でするどく描かれてゆきながらその演出手法はあたかも講義を博士から聞くごとき(さめきったきびしき)で画面から迫ってくる。恋に苦しむ中年の男のシーンが突如ジャン・マレーの時代劇のシーンに一瞬変る。また仕草のうえで上司と肌が合わぬ男のその苦しみのシーンが突如ジャン・ギヤヴァンの映画のシーンに変る。しんこくな苦しみのさいちゅうにこれはぶち壊しであろうにその瞬間のジャン・マレーの表情やギヤヴァンの表情が、現在スクリーンに登場のそれぞれの主人公の心のうちそつくりで、しかもその男ふたりの胸中のどこかに、二人は苦しみながらもジャン・マレーやギヤヴァンに自分の姿を投影していくごときユーモアが生れ、この映画演出の才能はただことない。

「ナポレオン」の三態画面、チエコの「キノオートマツト」、映画は科学とともに進み、感覚表現の創作とともに、ますます新しい世界へはいってゆく。



工口ース様

細川

董

(哲学者・文とえ)

て
つ
が
く
や
ん
こ
よ
。



細川董・ほそかわただす
京都大学哲学科卒「元大
阪精華女子大学教授、F
M大阪「夜の美術散歩」
編中。目下、アンドレイも活
躍中。
人註▽晶は哲。字体はす
べて高田竹山監修「五体
字類」による。

大金持の男の神がパーティの庭で酔いつぶれている所へ、貧乏の女神がパーティの残り物をごみ箱へひろいに来て添寝して、みごもつて出来たのが、エロースという男の子。

これぞ、ギリシア神話でいう、エロース様。

このエロース様こそ、わが憧れの哲学の主人公。

私のいう憧れを、絵にかいたような憧れの神なのだ。なりふりかまわず、美しいと思えば朝に恋いこがれ、夕べに死すとも、また翌日は生まれかわって永遠に美しいものへの恋に生きつづけるのがエロース様。

まあいってみれば、人間の憧れのチャンピオン。

前回お話をしたように、あのキス、このキス、と多々あるなかで「これがキスだ! これがこそがキスだ!」といふ風なキスというものはなかなかお会い出来ない。

しかし、それに憧れそれを求めるのが人間ではないでしょうか?

結婚にも、いろいろあるでしょうが、「これが結婚だ」といえるような結婚を私はしたいもの。

しかし、現実は一瞬のイデアの滞在しか人間には許されないと、アリストテレス先生もおっしゃつてるように、一生にさあ、まあ数日、そういう感じになると私は女に憧れ、女は女になることに憧れるというのが

も思うんですが皆様はいかがかな?

プラトン先生は学問知識よりもっと次元の高いものとして永遠の美を考えた。

知識は経験の積み上げで得られるが、永遠の美は、超能力、インスピレーションによって、こつえんと悟る、と見ている。

そりやそうだと僕も思うんですね。

絵だって、これがほんとうに自分のかいた絵だろうかと後で疑うほどうまくいくことがある。

こういう場合でないと傑作が出来ない。

何か個人というか、人間というかその能力を越えた宇宙の力が加わって偶々宇宙の調和にかなった小宇宙のようなものがそこに出来上がった場合に傑作というか永遠の美を定着出来たというか……。

私は芸術というのももこんなもんだと思う。
人生は短かく芸術は永い!

このもとの意味は傑作に到達する道のりの永いことをいつたものなのだ。

ああ、それに比較して人の一生の短かさをなげく気持ちは全く同感だ。

御紹介しておきま
すから、卒倒なさ
いませんように。
ルネツサンス期
のイタリアはナボ
リの宫廷婦人のセ
ックスの回数につ
いてのお話をひと
つ。

「私、彼が強い強

いというものです

から期待して結婚

したんですが、一

日にたった四回し

かしてくれません

の。がっかりだわ

！」

というお話が残っ

ています。

宫廷では、日に

六回が常識！ 十

回求められたら、こばむのが婦人のたしなみだったとい

うのです。

スケールが違い、ゾツとする話ですなあ。

これぐらいでびっくりするのは早すぎます。

日に一回はほんのオードブル！ おぼこ娘か病人用の

ほんのおつまみだというではありませんか。そればかり

か、

二回は紳士の礼儀。

三回は淑女のつとめ。

四回は妻の権利。

というのですから、あなたもまともな大人なら、ちょつ

とは考えを改める必要がおりではありませんか？



僕の哲学の根本体験だが、プラトン先生はギリシア神話のエロース様を持ち出して、僕のいう憧れをエロースというギリシア語に托した最初の学者だと僕は尊敬している。

ルネツサンスと西洋で呼ばれるときは、いつもギリシア精神というか、特にプラトンのエロース精神が復活してくるのが嬉しい。

人間はいくら憧れても憧れ足りないのだ。
大いに、まず肉体に憧れるべきだ。

肉体大いに結構。
もちろん、肉体には限りがある。

涙ぐましい努力も時には必要だ。
次に、西洋のエロース精神のふてぶてしさをちょっと、

★神戸ファッション市民大学OBによるグループ

<神戸のファッション都市化をめざす>

事務局／神戸市中央区東町113-1

月刊神戸っ子内TEL (078) 331-2246

●4月ファッションフェア参加／公開講座

アニマルちっくにクラシックに
立亀長三さん<アトリエナクト>

生活の2極分化ということは、かなり前からいわれてきた。お洒落着と普段着。生活必需品と余裕物。ファッションというコロコロ流行で変わる物はそういう2極分化で長い間使える本当の物、とか使い捨ての安い物、にどう入っていくのだろうか。

ということを考えさせるパリ通信、ロンドン便りの最近ですが、さてお待ちかねの立亀長三さんのヨーロッパの街角便り、多勢の方が集まりました。

(142人の皆さん、ありがとうございます)やはり行き悩む流行のせいかな。

ということでいつものようにスライドとお話ですが、「クラシックへの回復」がこの秋冬は中心になるでしょうでも勿論ネオ・クラシック。長い間ジーンズやカジュアルな服装に馴れた現

代人に今更、鯨のコルセットは無理というものの、部分にロココ（までデコラティブにならなくとも）16～17世紀の華やかなデザイン。

例えばレース、金糸の刺繡。手工芸を使った多分に女性の永遠の憧れの技法。衿はビクトリア女王の頃の小さくたった衿やフリル、色はクリーム色や黄色の淡い色が今の季節のヨーロッパに多いそうです。

そういうネオ・クラシックに対立しての流行はアニマルプリント。ライオンやひょうが刺繡してあったりプリントしてあったり野性とコンテンポラ

リーシティーの合体です

レース、金糸、アニマルと混ざっているようですが、すべて人間が衣服に持つ憧れの原点、ベーシックへ戻っているのでしょうか。



熱弁／立亀さん



満員盛況の公開講座たち

●会員ニュース

★春の京都旅行

5月10日(快晴)の日曜日、久し振りにメンバーの京都旅行。花のあの嵐山は保津川下りと洒落こみました。旅行団の団長／中島正義さん以下13人、8時半集合で亀岡までバスの旅。(何でも噂に聞きましたところ、バスじゃなくて電車で嵐山までいかれた不思議な方がいらしたとか……)

「もうねえ、ほんとによかったのよ、すごく最高だったのよ」と何かよくわからへんけど楽しそうな感想を張さんがおっしゃっていました。

ところで写真は？と聞くと、「フィルムを巻かなかったから写ってへんかったわ」と中島団長。というわけで写真はご紹介できないのであります。

★シンボルマーク募集中

KFSのシンボルになるマークを募集しています。応募資格は会員・非会員を問いません。ファンタジーナチュラルなマークを考えて下さい。

担当／田中謙司さん KENT 361-3644

6月マンスリーサロン

6月18日(木) 7:00～

講師／坂野惇子さん

場所／中小企業会館(センタープラザ16F)

テーマ／ディスプレイにおけるファッション

実際にディスプレイを担当されている方を講師に、ファミリア本店などの印象的なあのセンスあるディスプレイのこつを坂野さんに伺います。

会員／無料 一般の方／1,000円

7月KFS総会

7月17日(金) 7:00～

場所／ヒルハウス(北野町異人館通り・伊太利屋ビル斜め向い)

テーマ①新理事・会長改選 ②予算報告 ③そうして楽しくお食事

年に1度の大総会、久し振りの会員も(七夕さんみたい?) 多勢いらっしゃいます。是非是非参加を。やはり会員なら投票に1票を。

ひとつ・いん



カット／播 照三

★鮮魚と吟味された肉で
フランス料理を堪能

卷之三

ンチタイムは2000円のコースがおすすめです。

★エグゼクティブのための
名門クラブが神戸に誕生

手づくりのウイーン菓子が好評のモーツアルト神戸に姉妹店が5月1日誕生した。こげ茶色とホ

モーツアルト三宮
ウイーン菓子

●神戸うまいもん

北野町の会員制にしむら珈琲店が一ヶ月間の工事を終え、4月19日、2階にフランス料理のシェ・ラ・メ

ルにしむらをオーブンした。20席だけのこじんまりした店内は、川瀬オーナーの心のこもったインテリアがいかされ、広いで落ち着ける雰囲気がある。

白と黒を基調にしたシックなデザインは藤谷明正さんによるもので、籐のカウチセンター椅子も洒落ている。

ジョン・メルローさんも書いて



シックなムードの店内

ベテランシェフの石川さんが毎日中央市場へ材料を仕入れに行き、鰯やすずきを食べさせてくれる。前菜を3品と肉と魚デザート、珈琲のコース(8000円)が好評とか。ワインはサービス価格で一本ずつ抜いた栓を壁に飾ってくれる。ラ

欧風割烹料理の前菜を料理長の高橋さんが腕をふるつて和食器と箸で食べさせてくれるのが嬉しい。ホームバーとしても楽しんでもらおうと、25名限りでマイグランピングをしてくれる細

会員になれば、オンラインボトルシステム、エスカレートシステム、イヤネットワーク、廉価システム、大和実業グループ、全店利用システムの4つの特典が利用でき、価値あるクラブライフが楽しめる。

豪華で気品のあるムード



白く明るい店内に人気

会員になれば、オンラインボトルシステム、エスカイネットワーカー、廉価システム、大和実業グループ、全店利用システムの4つの特典が利用でき、価値あるクラブライフが楽しめる。

中央区北長狭通2-12
西村ビル

ミニユーパラチンケン（フル
ーツ、ショコラ、マロン、ヨー
ゲルト）550円

SPECIAL MESSAGE

神戸百店会だより



★元町3番街に春の訪れ
ルナケードⅢが完成

見上げれば、空

ポートピア'81を訪れた人たちにもエキゾチックな元町は人気のコースだ。

★モナコ大公ご夫妻

パールに感激

4月にポートピア'81御見学のため来神されたモナコのレー・ニエ三世大公、グレース王妃とステファニー・王

女は7日午後 瀬戸内海の田崎

真珠六甲台工場を訪問、真珠養殖作業やネックレス製造過程などを見学された。

が完成。4月25日には、パルパローレ前で竣工を祝つての神事とセレモニーが盛んに待望のルナケードⅢが完成。4月25日には、パルパローレ前で竣工を祝つての神事とセレモニーが盛大に繰り広げられた。昨年12月に一番街で誕生したのと同じクリーム色のファッショング性豊かなドーム型。

晴れた日にはアーケードを開いて青空を眺める楽しい趣向も味わえる。

当時は、あいにくの曇空だったが元町アイドルレディや楽団が元氣いっぱい商店街を行進、伝統とハイカラの街“もとまち”に新しい彩りが加わって各店とも

見上げるようにして中へ。引つ張るようにして中へ。



熱心にご覧

買い物はこの日の予定に入つていなかつたが、アコヤ貝への真珠の核入れ作業が同工場玄関脇に売り場が

★ボクがデザインした
ケーキができたヨ

子供の日の企画としてド

ンクの「子供のデザインケ

ーク」の入選作8点が4月

29日と5月5日の間、セン

ター街三宮本店に飾られて

いた。阪神間から応募総数

121点。3才から11才の子供

たちの絵を実際にスponジ

小粒の淡水産真珠のネックレスがお目当てだったらしく、希望の品を見つけ、大喜びの笑顔を浮かべられた。

★サン・ミヨシヤが改装
大丸前のサン・ミヨシヤが2倍の広さで改装オープン、以前からの鞄やアクセサリーなど洋品雑貨に加えて、靴や洋服も扱うトータルファッショニズムのブティックになった。インテリアもメタルと白木を使ってモダン・暖かさが調和。

「神戸は絶対ヨーロッパ指向。フランスとイタリアのファッショニズムを品質本位で集めた」と、みよしやの滝社長。「和服も洋服もファッションだから同じや」とはりきっている。

★宝飾のミキモトでは、「81夏新

作コレクション展示会」を6月28

29日に大阪ロイヤルホテルにて、

30日、7月1日に大阪梅田店(新阪急ビル1F)で開催します。

★モロゾフでは、ポートピア'81を

記念してお持ち帰りいただける

「白いチーズケーキ」を発売だ。

ミニのレアチーズケーキをフレ

ッシュパック。バナナップル、レモ

ン、オレンジ、ストロベリーの4

種類でそれぞれにミニサイズのケ

ーキソースを付けています。(300円)

また、ポートピア'81のシンボ

ルマークが入った素敵なベンダ

ト……実はメダル型ミルクチョコ

レー、ポートピア'81メモリアル

ブレート(¥300)も見学記念

にお子様へのお土産にどうぞ。

★呉服のちんがら屋では6月4日

7日まで、セントラル街店1・2

Fで「婚礼衣裳展」を開きます。

ぜひご高覧下さいませ。

●ショットピックス

小粒の淡水産真珠のネックレスがお目当てだったらしく、希望の品を見つけ、大喜びの笑顔を浮かべられた。

★ジューン・ブライダルに贈る「花と真珠のブライダルフェア」が、6月7日(日)に神戸オリエンタルホテルで開かれます。ショーオンの仕掛け人が語る「素晴らしい一日」に始まり、part I「華と書の出会い」、part II「花と旅の出会い」、part III「花と真珠の出会い」、part IV「花と愛の誓いとなっています。花嫁衣裳はすべて中川衣裳店。第1回P M 1・30と第2回P M 3・30と会員券2,000円



モダンと暖かさの調和

★つるや衣裳店では、「81夏新

(日)に神戸ポートピアホテルB F借業の間で「大展示会」を催します。ぜひお立ち寄りを。

★ユーポートホテルでは4月より直営のベーカーを営業しています。バー・スティーカー・クリスマスケーキはもちろん、茶話会や会合のお供として、又、贈答用にご利用下さいませ。

★宝飾のミキモトでは、「81夏新

作コレクション展示会」を6月28

29日に大阪ロイヤルホテルにて、

30日、7月1日に大阪梅田店(新

阪急ビル1F)で開催します。

★モロゾフでは、ポートピア'81を

記念してお持ち帰りいただける

「白いチーズケーキ」を発売だ。

ミニのレアチーズケーキをフレ

ッシュパック。バナナアップル、レモ

ン、オレンジ、ストロベリーの4

種類でそれぞれにミニサイズのケ

ーキソースを付けています。(300円)

また、ポートピア'81のシンボ

ルマークが入った素敵なベンダ

ト……実はメダル型ミルクチョコ

レー、ポートピア'81メモリアル

ブレート(¥300)も見学記念

にお子様へのお土産にどうぞ。

★呉服のちんがら屋では6月4日

7日まで、セントラル街店1・2

Fで「婚礼衣裳展」を開きます。

ぜひご高覧下さいませ。

New Face



アミリア北野坂ハウス



船橋雅人店長



ティールーム



リトル・ショップ



ユニークなケーキ

ケーキ台にチョコレートやクリームやジャムでデコレートしたもので、雨傘の絵や蝶々など、子供の発想らしい変わったユニークなケーキが勢揃い。入選作品の子供たちは実際にケーキをプレゼントされて「おいしい」と大喜びだった。

あなたの髪の水分は何パーセントですか」という某メーカーのシャンプー&リンスのCM撮りに俳優の石坂浩二さんが4月14日から17日まで神戸に滞在。「ファンシショナブルな街角で撮影」という製作側の意図でいちばんに神戸が浮かんだそうだ。元町通3丁目のフナキヤ前と、北野町で道行く女性に石坂さんがインタ



石坂浩二さん(右)と安達昭三さん
董屋覗く

ビューアー無事収録完了した。
「神戸に来たら骨董品屋さんを見学された。

★当館のおすすめは シフォンケーキ！

異人館の中心地、北野坂に4月29日ファミリア北野坂ハウスがオープンした。樹木に囲まれた庭園に、アーリー・アメリカン風の館が新築され、1階には30席のティールームが誕生。カラフルに囲まれたギフト商品中心のリトル・ショップも営業され、神戸らしさを大切にしたファミリアらしい店づくりに観光客も続々と入っている。ホームメイドケーキも一味違った味が好評だ

ポートピアだっこちゃん

おもちゃのカメラがポートピア81を記念して作った、オリジナルだっこちゃん。ピンクのリボンを頭につけて赤いハッピィを着ている女の子と黄色いハッピィの男の子の2種類。各630円。昔なつかしいだっこちゃんをポートピアの思い出におみやげにいかがですか。



新製品コーナー



★ミキモトの新社長をご紹介します。

杉浦 重敏さん 63才

大正7年生まれ、昭和15年株式会社三菱銀行に入社、46年退職後、株式会社ミキモトに入社、専務取締役に就任、本間利章氏の急逝に伴い、56年4月、後任として取締役社長に就任。新風に期待します

無休

■中央区北野町2丁目125番2

11AM~6PM

どなたの口にもぴったりの

スペゲティーだけが

とりえです。

だまつてすわれば

おのぞみ通り!!

東京・渋谷

スペゲティ専門店



壁の穴

<三宮店>

中央区三宮町1-5 サンロイヤル神戸10F (さんプラザ)

T E L 078-332-4551

営業時間11AM~9PM 第1・3月曜休

流れれる素描

久保田 匠子

絵／田中 一好



△ 6 ▽

登の理解しがたい憂鬱、不機嫌というものは、他からどうしようもない、そうして登自身にも統御出来ぬ彼の内部の暗い病巣からの噴気なのではあるまいか。

「暗いのに電気をつけたらどうなんだ」

いつの間に下りて来たのか、背後にヌーボーと立つて

登は陰気に言った。範子は思わず飛び上がった。彼女は夫に訊のわからぬ恐怖を抱いたうしろめたさを隠すために、水道の蛇口をいっぱいにあけて、それまで何とはなしに水をかけていた大根をごしごしと力を込めて洗い始めた。

「暗いじゃないか」

どこか弱々しく登はふたたび言つた。話すきっかけを

待つているのだとすぐさま察はしたが、さつきの荒々しい扉の音が耳について離れない。すると、急に登の気分に振り回されおどおどしたり、ほつとしたりするのがいかにも馬鹿々々しく思われてきた。恐怖から解放された反動もあつて、

「つけたらいでしょ、気がつけば——」

普通の夫婦はこれくらいの応酬はしているものだと、思い切つてぞんざいに返してみる。しかし、背後はしんとしてものの動く気配もない。範子には振り向かずとも

登の怒りを抑えかねて赤黒くゆがんだ顔がありありと見えるのである。ものを投げつけるか、ひと思いに殴りかかるかしてくるならばどれほどすつきりとすることだろう。氣心の知れぬ人だと心の中で呟いたが、その時、ふと、車の中からこちらを窺っていたもう一人の得体の知れない男のことが、彼女の脳裏をかすめ過ぎた。

登はそのまま足音も荒々しく二階に上がつてしまい、たかが明かりで、またもや面倒な事態を招いてしまったことを範子は悔やんだ。

姉が笑顔ではいつてきた。

「ハイ、晋ちゃん召しあがれ。今日はおじいちゃんの命日なもんで、朝から準備して造つたんよ。おいしいわよ」

大皿に盛つた五目しには、出前のようにサランラップが貼つてあって、キラキラと光る透明のその被膜の下に、淡黄色の卵の糸切りや、漆黒のもみのりが落葉のようにな高く埋まっている。

「なんだ。また五目ずしか」

と、次男が生意気そうに馬鹿にした様子で言つた。

「あら、まあ、またとはご挨拶ね。晋ちゃんの好物だと思つて作ったのに……」

「それは兄貴さんだよ」

「そう? そなだつたわね。おばちゃんうつかりしていだ。でも、まあ我慢して食べてちようだい。お兄ちゃん

の分もね」

次男の一面正直な言い草が気に障つたのか、それとも却つて嬉しいのかは、大きな声ではしゃいで言う姉の様子からは読みとれない。これ、と軽く子供をたしなめて、ご馳走さま、と範子はうやうやしく皿を受け取つて

テーブルの真中に置いた。

「姉さんもこれからここで一緒に晩ごはん食べない? わたしたちも淋しくなつていたんでちようどいいじやない?」

長男は昨年九州の大学に入学していた。その年はまた母が死んだ年で、その前年には父が死んでいた。親の命日も忘れて引け目と、姉の心づくしの料理を謝す気持ちからであつたが、姉と登を近づけるもろみもあつた。姉一人の食事の味気なさを思いやらぬでもなかつたのだが、登に気を兼ねて今までやり過ごしてきたのだった。

「言つてしまつてから、誰よりも最もそれを望んでいるのは自分ではないかと範子は思った。」

「いいのよ。わたしはわたしの好きなようにして暮らしているんだから。それにあなたたらと付き合つてたらお腹が待てないもの……」

チラッと登に目をやつた姉は、とんでもないという風に首を振つた。

「そう仰られると無理に誘えませんね。姉さんの所は晚ごはんが早いですから……」

登がもつともらしい顔つきで口を挟んだ。

姉は曖昧な微笑を浮かべると、そそくさと出て行つてしまつた。

すかさず乗じた登を憎いと範子は思つた。二人して誘つても姉は遠慮して断るだろう。登の気難しさを母以上に鋭く受けとめている姉には迷惑でもあろう。いや、一人暮らしの姉の本心を察すれば、見えすいた誘いでも一度三度と辞退してから、「それでは……」ということになるかも知れなかつた。それはそれで悪いことではない

はずだった。賑やかな長男がいなくなつて、この家も淋しくなつたと彼女は心底から思つた。

範子はサランラップをやや邪魔に剥ぎ取つて小皿におすしを盛り分けた。鮮やかな配色で飾られたお寿司の山は、努めて無難作に動かしたホークによつて無残に切り崩され、あらわな土塊のように小皿の上にひしげてしまつた。

「俺はいらんよ」

箸もつけないで登は断つた。

「どうして？ まだ食べられるでしよう」

「うちのでたくさんだよ… クレゾールの臭いがする」

「本当？」

範子は嗅いでみたが、甘酸っぱいお寿司の臭いが強く匂うだけである。

「気のせいよ。食べられるわ」

彼女は自分が丹精こめて作ったようになつかりしていだ。登がこのように言い出せば、金輪際後に退かないのがわかっていた。

「おいしいわ」

範子はおすしを頬張つて言つた。

「そうだろう。ふる里の味だからな」

と嫌味を言う。

「どうとでも言つたらいいわ。わたしみたいに三度三度食事を作らなければならぬ者には、頂きものはおいしかのよ」

「あんたはすしに目がないものな。まあ、たっぷりあるから急がずにやってくれえよな」

「僕もいらない」

まずそうに次男が箸を置いた。

「ケレゾールが臭うよ」

子供の不満げな顔を見たとたん、範子はカツとなつた。「あんたまで勝手なことを言つて——おばちゃんが一生懸命に作つてくれたのよ。人の親切を素直に取れないなんて駄目よ」

「でも、臭うんだから仕方ないじゃないか」
高校生の次男は、その父よりも冷静な目をして範子を見返した。いつもの彼女ならその目で我に返るところである。

「奥う、臭うって、そんなに詮索することないでしょ。あんたは食べるものがなかつた戦争中や、戦後のつらさを知らないから……」

「ナンセンス。知るはずがないじゃないか。それとこれとは問題が違うよ」

「だから教えてあげているんです。おばちゃんもね、戦争でひどい目にあつたんです。あの人は許嫁が戦死して…… その公報が戦争が終わつてから何年もたつて届いて…… 待つていたから年をとつたのよ。好きで一人でいるんじゃないのよ」

突然、姉を毛嫌いする登に逆らう気持ちが、奔馬のように範子の内部を狂おしく駆けめぐつた。

「おばちゃんが五目ずししか作らないというのも作れないのでないよ。戦争のあと永い間、五目ずしを食べるのがおばちゃんや、お母さんの夢だった。ケレゾールが少しぐらい臭つたって、おばちゃんのことを考えたら食べるべきよ」

範子は熱に浮かされたようになつていて。涙が薄く滲み出でている。日頃、家庭をかまけなかつた父が、白米を手に入れるために縁故を頼つて走り回つていった姿が、脈絡もなく目の前に浮かんできた。窮乏生活だったけれど家族が心を合わせた楽しい時代であつたと思う。

彼女がまくし立ててゐる間に、登の顔色が少しずつ蒼くなつていつた。酔うほどに蒼くなる人のような様子でじっと前方を凝視している。その表情を崩さずに、「今さら、戦争中のことなど持ち出して何になる」と、低くせせら笑つて言つた。

「そう言うあなたはどうなの」

「……」

「コンゴみたいな所でも言わざにおれない癖して……」

弘子の所へ行っているのは間わないでおこうと範子は決心していたのだった。だが口に出してしまった。軽率だったとは思わなかった。彼女は夫の顔色ばかりを窺つてゐる関係に飽き飽きしていた。これで悪くなる間柄ならいすれ止められないだろう。

範子はすっかり興奮から醒めてしまつていた。反対に登は憤怒に我を忘れていた。

彼女は子供にめくばせをした。次男は待てよ、といった態度でごはんにお茶を注いで搔き込むと、むすつとして席を立つて行つた。そのわざとらしい悠揚とした後姿を、範子は息をこらして見送つていた。

「俺がどこで何をしよう、いちいちあんたに干渉されることはない」

呻くように登は言つた。範子は、あんた、という言い方に冷ややかな拒絕を感じた。

「そうじやないのよ。あなたに戦争の傷跡があるなら、姉もあるということを言つてゐるのよ」

「笑わすな、ぬくぬくと育つたお前たちに戦争の本当のつらさや、苦しさがわかつてたまるものか」

「だつたら弘子さんにも言わなきやいいでしよう」

陥しさや、神経的な怒りを浮かべることがあつても、登の顔はかつて冷酷であつたためしはなかつた。気が小さく、そして弱いために内部の鬱憤を抑えきれなくて外に噴射するのであつて、どれほど怒つても苛立つても、登のその人間的な弱点は範子に親しさを失わせなかつた。

今、登の目を範子は冷たいと思つた。これまで見せた

ことのない突き離した冷淡な登の視線が、自分の左頬に当たられているのを捕えて彼女は思わず顔を伏せた。一瞬、灼けつくような痛みが頬を走つた。

登の引く椅子が床をひときわ高く軋めさせた。彼はしばらく頭を垂れて考え込んでいたが、立ち上がつた時と反対に、足音を殺すようにして奥に去つてしまつた。その忍びやかな動作が巻き起こす空氣の微かな波動に彼女は注意を奪われていた。目にも見えず、皮膚にも触れぬ微細な動きは、範子に鋭い刃の切つ先を突きつけられたような緊迫感を強いた。

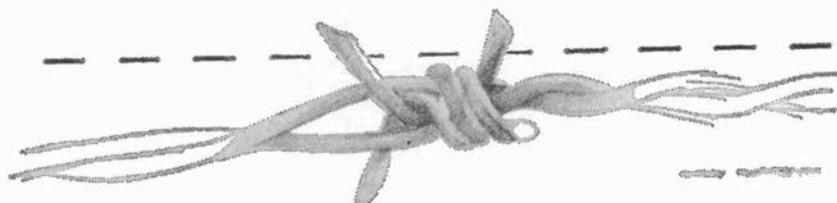
すぐに登は出て來た。通勤用の背広を着込んでいる。

「今夜は帰らないからな」

乾いた声で投げてる様に言いながら、はや靴に足を入れている。

登が気安く泊まれる家はどこにもないのを知つてゐる範子は止めようとした。だが凍りついたように舌は動かなかつた。こんな場合、泣き叫んだり、臓腑をしぼり出すそれが登を引き止めずにはおけぬ、決定的な言葉を持たないことを彼女は悟つた。

悪夢としか思えないあの雨の夜の出来事がまたもや起ころうとしていた。風のように身軽く家を出ようとする登の姿は、既定の行動のごとく呆氣なく自然だつた。だが、彼女には逃げるよう自分から去つて行こうとしている登の屈んだ背中が、ひどく孤独なものに感じられた。登もまたこうした行為でしか叫びを表わすことが出来ないのだろうと、金縛りになつた頭の一隅で考えていた。



何故、引き止めなかつたのだろう……と範子は何度も考えた。引き止められないということはないはずだつた。どのような場合であれ、出て行こうとする者を留まらせないのは、止める側の責任ではなかろうか。彼女は手を挙いた形で登を行かせた自分の心に、どこかでそれを望んでいるものがあるのではないか、と思つた。

範子は左頬に当たられた登の、嫌悪とまがう冷たい視線を忘れることが出来なかつた。二人の間には火傷の跡は既に意味を持たなかつた。二人で支え持つた二十年余の歳月が、それを纖弱な感傷、もしくは悲嘆とみなすことに変えていた。だがそのことにこそ登の憎しみはあつたのではないか？ 意味を失なつた火傷の跡は、登にはただ目障りな傷跡に過ぎなくなつてゐたのではないか。頬に引きつりを残した鬱陶しい女としてのみ映つていたのではなかろうか。座興としか範子に受け取れない彼の軍隊時代の思い出話と同じように……

空虚な痕跡を四六時中、目の前にしての登の苛立ちもまた、空虚な影を四辺に投げかけていた。

そうした考え方を追つてみたものの、引き金となつた事柄に比べて登の取つた行動は重過ぎると範子は思はざるを得ない。彼を引き止める言葉を探し当てられなかつたようすに彼の行為は彼女の理解の外にあつた。考えれば考えるほど登という人間がわからなかつた。

もし、登がなりたくない人間としての現在の己が姿に訣別をつけようとしたのなら、それは自分との間でなされではないと思う。戦災死したと一括して彼が言う身内——彼の父母、兄——を、かつて懷かしんだことは一度もなかつた。範子は彼の不機嫌の、更に奥暗い断層を見せつけられるのを予感して、彼らに触れることはしなかつた。あきらかに捕えられることは出来ないが、範子には知り合えなかつた登の身内と登との関わり、そうして登自身の問題として解決されなければならないのではないか。

が出来たであろうか。範子は少年の北山和男の渴望を理解したごとくに、登を理解しようとした。だがすぐさまその思いははかなく消えてしまつた。範子の網膜には、たえずやみくもな衝動に突き動かされている登の像が、意味不明な輪郭をもつて、ただくろぐろと浮かびあがるばかりであつた。

自分は何故このような場所で、息をひそめて暮してこなければならなかつたのだろうか——と、範子は呆然として、古び、燻んだ家のなかを見渡した。彼女にわかつたことは、二人の子供がまだ幼ければ、自分は決して登を行かせなかつただろう、ということだけだつた。

ラジオ体操のリズムに合わせて、姉が束ねて使う二本のハタキは、悲鳴のようガラス戸を震動させた。二階に寝ている次男が、かなり前から目を醒ましていてるのに範子は気づいていた。毎朝、この傍若無人なだけだつた。登も次男も明け方の眠りは深く、滅多な音でなければ目醒めない。その父の感情的な性格に却つて鍛えられるのか、次男は理性的な若者に育つていて。しかし、昨夜のことは彼にとっても相当な打撃であるに違ひなかつた。この次男のためにも登を引き戻さねばならないと醒めた朝の冷静な頭で彼女は考えていた。意地や、憤りはなかつた。あるのは諦めと不安、もしくは危惧——登は無事で一夜を過ごしただろうか、という危惧だつた。(続く)

文／久保田匡子（くぼた・きょうこ）

昭和二十二年、大阪市に生まれる。大阪府女子専門学校国文科卒業。同人誌「まひる」「風群」「海馬」にて作品を発表しつづける。現在は「原声」（堺市）同人。「風群」に発表した『暗い陵園』で第六回太賞候補となる。主婦。大阪市在住。

絵／田中好（たなか・かずよし）

昭和二十一年、神戸市に生まれる。京都美大卒業。市立高羽小学校に勤務するかたわら新鮮な着想と深い詩情の世界を描き続ける。53年に第一回エンバ美術コンクール佳作受賞。東灘区在住。